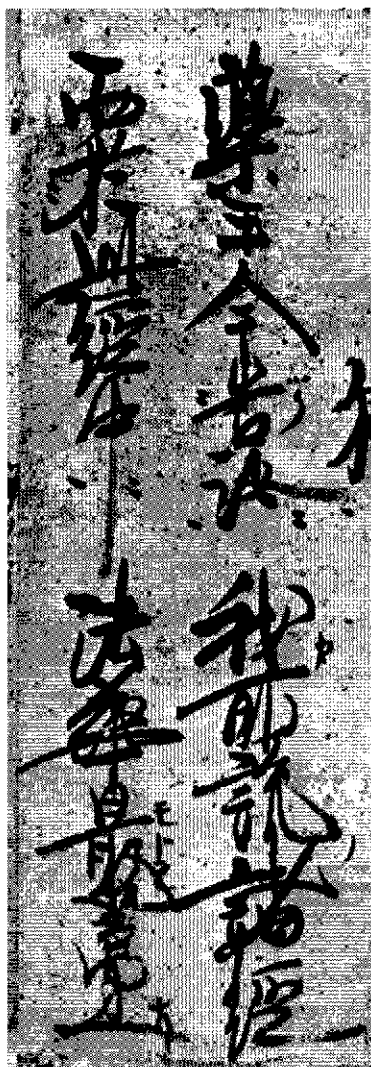




今月の御聖訓



(薬王、今汝に告ぐ。我が所説の諸経、)

薬王、今告^レ汝^ニ。我^ガ所説ノ諸経、

(而も此の経の中に於て法華最も第一なり。)

而^モ於^ニ此ノ経ノ中^ニ法華最^モ第一^{ナリ}。

【一代五時鷄図 新定二〇七四頁】

目次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
【法華講義】「信行雜感二、三題」	菅野憲道	2
御書と日興上人 [189]	松田銘道	8
【法華講總會所感発表】		
「私の信仰を振り返って」	中川美奈子	10
「形か心か一父が継続したものは」	橋本良介	12
【所感二編】「女子挺身隊」「苦難の時代」	山田昌	14
【紀行】「聖跡巡り」	井元恵子	17
【法華講義】		21
七月の行事 文月詠草 恵日俳壇 訃報		

巻頭言

法臘六十三年

菅野 憲道



六月十一日、テニス四大会の全仏オープン男子シングル車イス部門で初優勝を飾った小田凱人（おだときと）選手の快挙が報じられた。史上最年少の十七歳、レジエンドの国枝慎悟選手の後継と期待された逸材の偉業でもあったが、ある新聞のコラム欄に載った話しも心に残った。というのは、小田選手は、インタビュウーの中で、十六歳の時に一生を賭けてプロテニスの道を歩む決意をしたという。

記者が、十六歳で人生を賭ける強い決意をした若者に驚くのは自身の経験に照らしての感想だったかもしれない。小生も十一歳で出家したとはいえ、僧道が続けるのに迷いがなかったわけではない。本当に覚悟を決めたのは数年たってからのこと、今生はこれに賭けようという決意をした。それから迷いもなくなった。

先輩、同期、後輩に多くの友人がいるが、迷ったあげく飛び出した者をアパートまで強引に連れ戻しにいったこともある。何でも有名企業に就職まで決まっていたという。ある友人は還俗して数年後街中でバタリ出会うこともあった。まっすぐな心根の持ち主だったがちよとした行き違いでやめてしまった。関取衆が一目も二目も置く酒豪の親友といえば僧侶間では大方検討がつく。遺骨になって再会した同期生もいる。中には本業より余技の方がプロ級の腕前という人もいて、これは道を間違えたのではなどと噂したものである。一生覚悟も決まらず、斜に構えて続けている者もいる。一人の僧侶を育てる大変さを知っていた日達上人だから一度脱落した者でも何とかつれ戻そうとする温情ある宗門だったが、次の詐称貫主は二百人も教師を弁明の機会も与えずに擯斥にしたのだから、尋常ではない。仏教史上未曾有の椿事である。この道に入り、覚悟を決めてからは良い修行をさせていただいたが、擯出まで経験できるのは本当に名誉なことだ。

お講講話(要旨)

拝読御書 「法華初心成仏抄」(全集五四四頁)

信行雑感 二、三題

菅野 憲道

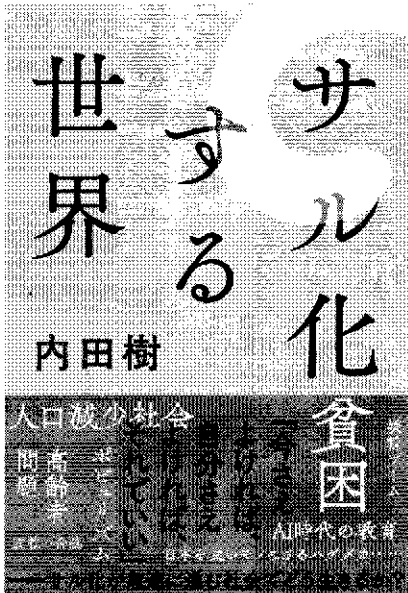
《社会の変化と人間の退化》

昔は、中年より老人の方が経験も豊かで、いろいろなことを知っていると、誰もが敬われたものです。地域の歴史や生活の知恵など子や孫たちに伝えて、地域の伝統や文化が受けつがれて来ました。

しかし最近、技術の発達とともに社会が急速にデジタル化し、ライフスタイルも一変し、老人の経験や知識も今や昔話となっていました。

たとえばスマホの使い方のように、お年寄りの方が子どもに教える場面が多くなって、そういうところから最近はお年寄りがあまり尊敬されなくなってきました。

またスパーや駅、各種機関のATMやレジの前で戸惑う老人に、後ろに並ぶ人の視線は険しくて、デジタル社会に順応で



内田 樹 著『サル化する社会』

きなれば、いずれ疎外される未来を物語っている。果たしてこういう変革が人に優しい世の中をもたらすものか、それとも不適応者の排除に向かうのか、疑問です。増え続けるカードやアプリ、際限ないID、パスワードの要求、押し寄せる偽メールやウイルス、利便性の陰で多くのトラブルに泣かされることになります。ベルトコンベアで運ばれる荷物のように、庶民はこの世が何処に向っているのか知ることがないままに、あるべき未来像など示されることもなく、「経済優先」の旗をふりかざされて、バラマキ財政を繰り返し、異次元の金融緩和で気がつけば作った赤字が一千万

数百兆円、総理も日銀総裁も退任すれば責任を問われることのないが、残された負債はどうなるのでしょうか。

最近、内田樹氏の著書『サル化する社会』が話題をよんでいます。氏は同書で「今さえよければ」「自分さえよければ」

それでいいという人が蔓延してきて、社会がサル化してきたのは、人類が退化するフェーズに入ってきたからではないかと警鐘を鳴らしております。

こうした傾向は、現代人が時間的、論理的な思考が不得手となり、動物のように刹那的で、自己中心的な行動が広まってきたために大きな時間をもってものごとを判断するような、より高度な精神的な営みが失われる退化現象でもあり、日本特有の傾向ではなく、世界的に見られ徴候だというものです。

《煩惱を自我の主とするの愚》

このことは、以前から取り上げているテーマでもありますが、現代には「何でもあり」というような多様な価値観が生じ、それが自由の尊重ともあいまって、芳しくない悪思想や悪弊も無秩序にひろがってきて、次第に人間の精神をむしばんでいるようです。氏はその理由については考察をしております。私はやはり、現代人に宗教心がなくなってきたことが、大きな要因のように思います。宗教は人間のみが持つ精神文化です。人間のみが生と死を予測し、おのれの生きる意味を考えるのです。したがって人間がサルや動物と同じような次元で、五官の欲求のみに終始する人生なら、その人は後先を考えることはなく、いずれ弱肉強食の畜生界か修羅界に堕ちてしまいます。国家や民族の関係でも、軍事力や経済力、情報力といった腕力まかせの対立になって、互いに深傷を負うまで争い続けます。

宗教心のない人々は、自身の精神世界のご真ん中に我見という自我意識がやどることになります。すなわち煩惱を中心とす

る生き方です。煩惱の根本は次の四つあります。

① 我見Ⅱ自分という主体的な自意識を持つ実体が存在すると思
い込んでいる。身見。

② 我慢Ⅱ慢心やうぬぼれ、根拠もない自信過剰。

③ 我愛Ⅱ自己をかけたがえないものと特別扱いして偏愛する。

④ 我癡Ⅱ仏法の真理に無知で、ボンヤリ一生を送る。

即ち、「我見」「我慢偏執」などが煩惱の代表ともいえます。

最近、世間では「心の思うままに生きる」などという人がおりますが、それこそが煩惱に振り回されて、迷いと悔いばかりの人生になることはうけあいです。なるほど、意志の強い方や、リッパな見識をお持ちの方は、なに事も自分の力で生き抜いていけるといふ想いをもたれていることはわかります。

しかし自分の力といつても、精神も身体も環境もすべてこれ因縁所生の現象ですから、いずれは無常無我の実相に直面することになり、慢心などはたちまち喪失します。その時に、自分の心身ですら自分の思うようにならないことに気づき、自分の力で生きて来たという思い込みも崩れて自信も失います。

ましてや、人生経験の浅い若者が、なんの海図もたずに、こころまかせの航海に出るようなことは、無謀きわまりないことではないでしょうか。大聖人は涅槃経を引かれて、

「心の師とはなるとも心を師とすべからず」（義浄房御書）
と仰せられ、また世間の道歌にも、

（心こそ心迷わす心なり 心、心に心許すな）とあります。近代以前の人は、現代人よりはるかに忍耐力や創造力、精神の鍛錬に勝っていたでしょうが、その上になお心に油断せず、心を

磨いてコントロールすることを心がけていたように思います。

《現代社会がエゴイズムを増長》

また本来、仏教は「自分さえ良ければ」というエゴとはほど遠いものです。この世界は無始無終の妙法の現象で成住懐空を繰り返しながらあらゆるものごととの関係において成り立っており、決してそれ自身で独立して無関係に存在するようなものではなく、すべては因縁所生といて、縁起から起こると説いていますから、利己的な考えは否定され、もろともに生きていく、という見方が定着してくるのだと思うのです。

その流れから見ると、現代人が宗教心を失うことは、自我という煩惱を根本にすることになりますから、どうしても唯我独尊的に、唯一絶対の基準となり、自我への偏愛は、対立するものを排除する働きとなつて、そこから他者との間に我他彼此する対立が起こつて来るのではないかと思えます。いろいろな国家間の対立も個人個人のレベルでの争いも、結局自我を絶対的なものと見なし、他者を支配するか、もしくは認めないような独善的な心から起こってくる争いのように思うのです。

しかし、考えてみれば、何一つとつても、そのものだけで生きていく、固有の存在はあり得ず、すべてのことが想像できないほどの幾千もの関係性の上に成り立っているのですから、遠くの方で起きた事件や事故も、無関係ではなく。あるいはまた時間的に考えれば、過去の歴史上の出来事が、今日我われの生活にも大きな影響を及ぼしていることは今更説明することもありません。ささいなことでも、今日あったことが、十年後に別

のところでは影響があることも考えられるのです。

それにもかかわらず、我われが自分の過去や未来も知っていないようにほとんど何も知らないのは、自分の背中を知らないのと同じようなことです。ものごとには、必ず表面的に見えている部分と、同じ位置からは絶対見えない部分があるものです。であれば一部分だけですべてを見たような気になつては氷山の一角を見たに過ぎず、顛倒見のもです。ものごとの相、性、体、力、作、因、縁……の全体を見聞するには我慢偏執の心を捨て、あるがままに見るほかはないのです。

その意味で現代人が宗教心を失つて、それぞれが我慢偏執の眼で物事を捉えていけば、迷乱するのは当然のことと思うのです。

《各宗の依経と法華経の違い》

さて、世間を見ますと、いろいろな考え方や生き方があつて、それらの考え方や生き方に、大部分の人は自信を持っていて、自分の生き方、考え方で間違いは無く、正しいんだという思いをもっていることが多いようです。中には自信なさそうに迷っている人もいますが、確かに自信過剰でなんでも自分が正しいのだと思っている人も、相当いるのではないかと思います。大聖人の時代も、拝読した御書の冒頭に、

「今日日本国を見るに、当時五濁の障り重く、闍諍堅固にして瞋愚の心猛く、嫉妬の思ひ甚だし。」（全集五四四頁）

と表現されていますが、煩惱とか世の中のいろいろな乱れとか、闍諍堅固といわれるように、言い争いや裁判沙汰、終いには実

力行使まで、紛争のたねは尽きないものです。

最近、よくネット上で、炎上とかバッシングなどといわれていますが、一つの事件が起こると、それを大勢の人で寄つてたかつて、誹謗中傷を繰り返して、ほとんど吊し上げのような状態にまでなることがあるようです。

個人だけでなく、今の時代はSNSとかツイッターとかいろいろな情報発信手段を、個人が持っていますから、企業の担当者などは、うっかりいい加減な対応でクレームを怒らせると、あちこちにそれが拡散されて炎上して、企業がものすごい損害をうけることがあるようです。ガーシー議員などもネット社会に生まれた新種のあだ花だったようです。

これは仏教の一番基本的な考え方に通じていることで、仏教は最初は我われが持っているような自我主義、実存主義、快樂主義、利那主義を批判して、苦・無常・無我を説かれて、無常観を教えられたのであって、最後に本懐の法華経が説かれた時には真の意味での常楽我浄がとかれたのです。すべてのものごとは本質的に縁起・縁生という因縁の理法によって生じた現象であるから理観によれば一緒であるけれども、事観によれば桜梅桃李それぞれで、一つ一つ見ていくと、みな違った因縁を持つているのです。而二不二といって、善悪、苦楽の立て分けは絶対

的なものではなく、仏の見方、凡夫の見方など、見方の違いによるものです。であれば、なによりも仏法を信じ仏知見を信ずることが肝要なのです。



砂漠の「良い天気」とは……

分かり易くいうと、例えば猿と人間が違うことを、子どもなら動物園に連れていって、「これがお猿だよ」と親がいえば、子供はそれで、猿とはこういうもので、済んでしまいましたが、猿の飼育係の人からすればそれだけでは済みません。猿は種類も違い一匹一匹個性も違っていて、それぞれ名前を覚え性格を覚え、年や個性を覚えた上で飼育していて、全部一緒という考えで飼育にあつたら、とんでもないことになってしまいます。

それと同じように、我われも日常的に「良い天気ですね」という挨拶をしますが、この言葉一つとっても人によって、「良い天気」は違うのです。

極端な例でいうと、砂漠で生活している人にとっては、太陽がジリジリと照りつけるような日など、良い日とはいえないのです。実際に、カイロあたりに行きますと、曇り空の時には「良い天気ですね」といつても、晴れた日などは、嫌な日ということになってしまふそうです。ですから、同じく良い日でも、実際には一人一人、その時々で因縁が違ってきますから、違った様相を呈するのが

事実だと思ふのです。

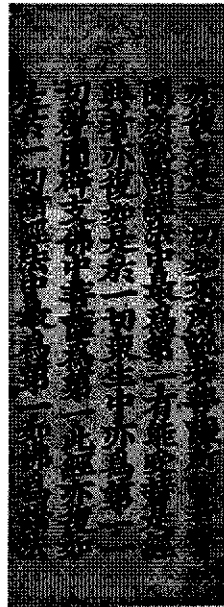
そういうことを法華経では、「如実知見」といつて、あるがままの姿、本来のありのままの状態を妙法と指しているのです。ですから、すべて同じだという本質的な次元と、表面的にはみんなそれぞれの因縁によつて違つた様相を呈するという両方が、一つの存在の上にオーバーラップしていることになるのです。

ところが、実際には我われはそういう深いところまでは見ませんから、表面的なことだけで物事を考えて、自分が見たことだけで、唯一絶対のものの方のように勘違いしてしまいます。そこで我と我のぶつかり合い、ということになつてしまふのだと思ふのです。

そういうことは世間の中においても、そうですし、当然宗教の上においても、起こつてくるのです。宗教では余計自分の信じているものが唯一絶対であるという、一種の我慢偏執につながつてくるのですが、そういう心で対立しますから、必ず議論してもほとんど同じことのくり返して、少しも進展がなく、ただ論争だけしてくたびれて、何も進歩がないということになつてしまふのです。

そういうことで、仏教の中においても時代が経つほど、いろいろな宗派、華嚴宗とか真言宗とか念仏宗とかいろいろな宗派に分かれて、それぞれが議論を繰り返して少しも決着がつかないまま、さらに乖離がひどくなつていき、いろいろな争いが盛んになつてしまつたと思ひます。

こういうことについて大聖人は、宗教それぞれに格別に自分



「最為第一」(末行。薬王菩薩本事品)

の宗派の教えが一番勝れていると主張するけれども、それは人師のいつていることで、その人が自分が正しいと思つて発言をしているのであつて、それはどこにも根拠がないと仰るのです。お経の中にそう書いてあるならともかく、お経の中にも書いてない、ただその人がそう思つて言つていただけということになるのです。

なるほど言われてみれば、大抵の場合、自分が最高だ正しいと、唯一絶対であるように主張するのですが、そう主張する根拠になる教えや仏典といったものがあるかといえ、ほとんどの場合そういうものはないのです。ただ自分の思いつきや感情だけで、自分が正しいといつてゐるのです。

大聖人の教えは、決して大聖人の個人的な教えではなくて、法華経に書いてあることがすべてなのです。法華経に書いてあることを、その通りに人々に説いていく立場ですから、むしろ大聖人ご自身のお言葉はほとんどどころか、全くないのです。百パーセント全部、法華経に基づいて教えられているのです。

その意味で、法華経にはもともとこのお経が過去にも現在にも未来にも、仏様の悟りをそのまま説かれた唯一の教えであることが、何度もくり返し説かれてゐるのです。

他のお経には、そのお経自体が最高であるというようなことは一切書いてないのですが、法華経にだけは、

「最為第一」

「已説。今説。当説。而於其中。此法華經。最為難信難解。」
「最在其上」

等と、いろいろな表現で、法華經こそが真実最高の教えであり、唯一仏様の心を表現したものと書かれており、さらにはあらゆる仏様の師、規範となる教えであるという表現もとられていまますから、その意味で、本質的に法華經が最も優れたお経である、正しいお経であると主張すると、他の宗教の教えが最高であると主張するのでは、全く意味が違っているのです。

《言葉もメッキも時がくれば、いずれ剥がれる》

我われもこの点をはき違えると、世間並の自己主張に墮して、我執から主張しているのか、法華經に書いてあるからそういつているのか明確に区別しないまま、ただ自分が正しいことをいわんがために法華經を利用するというのでは、おかしなことになるのではないかと思うのです。

考えて見ると創価学会の信心とは創価学会の勢力を弘めて、日本の権力や財力等を自分たちの支配下に置くことが真の目的であったことは明白です。池田大作氏の野望のために仏法を利用したに過ぎません。

今考えてみると『人間革命は現代の御書』など高声に言い募ったことが、創価教学なるものが矛盾だらけで全く無意味な作り事だと自ら証明した瞬間でもあり、記念日でもあったわけです。

今さえよければという後先も考えない人々が、三十年ももたなかった嘘を並べて巨大組織を引きずって行こうと言うのです

から荷が重すぎるのではないかと他事ながら気の毒には思いません。

我われが信心修行するのは、自分の一念心の中における五濁の障り、貪欲・瞋恚・愚痴の心であるとか我慢偏執の増上慢の心といったものを、お題目を唱えることによつて浄化していくことにあるのです。

「寸善尺魔」といつて、我われの一念の中にはいろいろなことがあつて、正しいことをしていても、突然それが悪い感情に変わってしまったたり、仏様の心を体しているつもりが、いつの間にか魔の心が変わってしまったたり、誠に人間の心は不思議なもので、いつでも魔が競うようなことになってしまいがちなのです。そのために、我われが朝夕にお題目を唱えることで、そういう悪心を少しでも浄化していく、あるいは自己中心であったり怠惰だったりしてしまふ心を、お題目を唱えることによつて一心清浄の信に転じていくところに、信心修行の本来の姿があると思います。

世間でも、最近はだんだん我われの心、精神の問題と、身体や健康の問題が、決して別々のことではないことがわかつてきて、ずいぶん心理的な療法も取り入れているようです。しかし、それらのことは仏教では、昔から色心不二として説かれております。われわれの信心修行も、身口意に一致した南無妙法蓮華經なのです。心の中に悪心を抱いて、いろいろな邪念を起こしていたのでは、少しも南無したことはありませんのです。

余事余念なく受持できるよう精進したいものです

南無妙法蓮華經

(了)

〔御書と日興上人（一八九）〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一二三）

松田 銘道

前回は、山上弘道氏の②「日蓮大聖人曼荼羅本尊の相貌変化と法義的意義について」（『興風』十七号）から、身延後

期には二つの本尊観を示されたことについて検証してきました。今回は、山上氏の①の「日蓮大聖人の思想（六）」

（『興風』十六号）と②の論文に注視した都守基一氏の「講演要旨『三大秘法について』」から、身延後期の本尊観について見ていきます。都守氏は、弘安元年（一二七八）九月の『本尊問答抄』に、
・釈迦を以て本尊とせずして法華経の題目を本尊とするや。
と示された一文について、

「私見によると右の一節は、大曼荼羅の授与にさいし、釈迦の形像ではなく題目によって本尊を顕した理由を説明

したものであることに留意しなければならぬ。

「釈迦を以て本尊とせず」とは、そのことをいったもので、釈迦像の造立を禁止したものでないことは、弘安二年二月二日「日眼女釈迦仏供養事」（一六二三）等によって明らかである。

「題目を本尊とする」とは、もともと「題目の一法から分かれ出た本尊が、再び題目の一法に統合された姿を表現したものとみれば矛盾はない。上行所伝の「五字の大曼荼羅」が三国未曾有の「御本尊」であることは、文永十二年の『新尼御前御返事』（八六六〇八）

に詳しく論じられていたとおりである。題目が表になつてにせよ、その裏に教主が隠れていないとはいえない（

切り捨てられるのではない）。『以一察万抄』にみるように、三大秘法は要の一法の三面である。一大秘法たる南無妙法蓮華経の題目に本尊たる本門の教主釈尊と広宣流布の証である本門の戒壇の二義が含まれるという原則は不変であると思う。」

との「私見」を示しています。

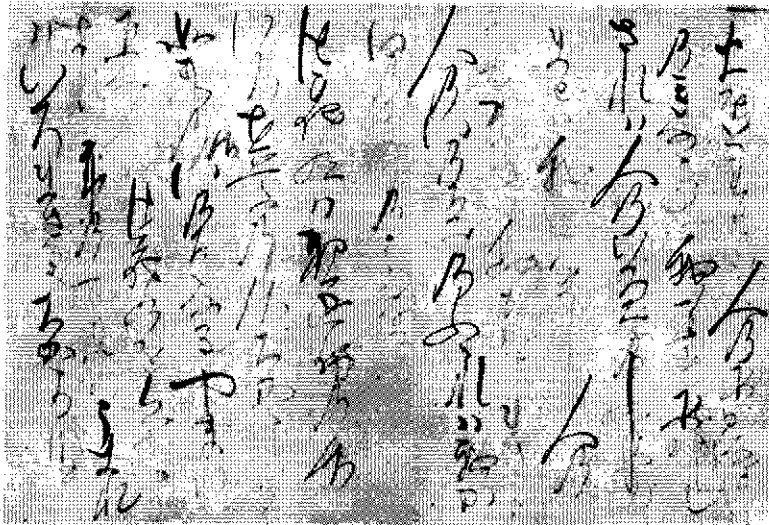
ここには、山上氏の①と②の論文には何も触れていませんが、「釈迦を以て本尊とせず」との一文について、

・釈迦像の造立を禁止したものでないと、また、「題目を本尊とする」との一文について、

・もともと題目の一法から分かれ出た本尊が、再び題目の一法に統合された姿を表現したものとみれば矛盾はない。

と、『本尊問答抄』から二つの本尊観を読み取っていて、山上氏の①と②の考察とは異なっています。すなわち、山上氏は①の論文で『本尊問答抄』について、

「本抄においては、身延前期『観心本尊抄』『報恩抄』を中心として示された本門の教主釈尊を中心に据えた本尊



建治2年(1276)2月以前の『高橋殿後家尼御前御返事』(真蹟断簡、5箇所分蔵)

山上氏は、「法華経は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の御いのちなり」(8行目)との一文には、「釈尊および仏的存在が、法華経乃至法存在によって相対化されるその兆候」であり、『本尊問答抄』との関連性を指摘している。

その本尊観は、「釈尊および仏的存在が、法華経乃至法存在によって相対化され」た曼荼羅本尊。このように、『本尊問答抄』には、「相対化」による「大聖人の新境地」の曼荼羅本尊が示されている、との見解を示しています。また、そのような新たな本尊観とともに、

観から、諸仏の師であり父母である妙法五字を中心とした本尊観に移行せんとする、大聖人の新境地が示されていると見るのが、最も自然であり妥当であろう。なお、釈尊および仏的存在が、法華経乃至法存在によって相対化されるその兆候は、身延前期に既に現れる。すなわち『高橋殿後家尼御前御

返事』に、
法華経は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の御いのちなり。
と、法華経が釈尊及び諸仏の力であり命であると述べられているのであり、『本尊問答抄』はその延長線上に示された一つの結論といふべきであろう。」

との見解を示しています。

ここには、
・『本尊問答抄』には、「諸仏の師であり父母である妙法五字を中心とした本尊観」が示されている。

・その本尊観は、「釈尊および仏的存在が、法華経乃至法存在によって相対化され」た曼荼羅本尊。

このように、『本尊問答抄』には、「相対化」による「大聖人の新境地」の曼荼羅本尊が示されている、との見解を示しています。

また、そのような新たな本尊観とともに、

「かといって、当然のことながら久成の釈尊が否定されたと考えるべきではない。身延前期においては本門の教主釈尊が中心に据えられたとはいえず、その本門の教主釈尊と一体不二の一大秘法たる妙法五字が、本尊の不可欠要素として提示されていたことは、先に示した『曾谷入道殿許御書』の文に明らかである。

同じように、ここにおいて本尊の主体が妙法五字に据えられたとはいえず、本門の教主釈尊もまた本尊の不可欠要素として存在していることは、弘安二年七月十三日状『孟蘭盆御書』に「あをぐところは釈迦仏、信ずる法は法華経なり」とあるなど、類文は枚挙にいとまなく疑う余地はない。」

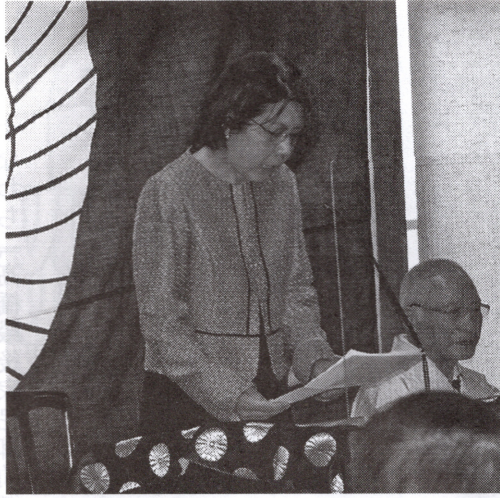
と、『観心本尊抄』『報恩抄』を中心として示されてきた身延前期の「本門の教主釈尊」は、身延後期にあっても「不可欠要素として存在している」との見解も示しています。

このように、都守氏と山上氏が、『本尊問答抄』から考察した二つの本尊観の内実は異なります。(続く)

【所感発表】

私の信仰を振り返って

北摂地区 中川美奈子



所感発表をされる中川美奈子さん

第五十一回法華講総会おめでとうござい
ます。

北摂地区の中川美奈子と申します。

私の信仰を振り返った話をしたいと思
います。よろしくお願ひします。

私の信仰は、母の信仰が始まりです。

私は、四歳の時両親が離婚し、母の実家の

熊本、祖父母のところに預けられました。

母は、私と一緒に暮らすため、大阪で生
活の基盤を整えようと頑張っていたので
が、その時に創価学会の方に、信仰がな
かったら、一人で子供を育てていけない、と
言われて入信したそうです。それが、母の
信仰の始まりだそうです。

その後、一所懸命信仰を続けていま
が、創価学会の間違いに気づき、脱会して
源立寺に来たそうです。

母が信仰を始めたお陰で、私は九歳の時
に母と暮らすことができ、源立寺でご受戒
を受けました。

いつも母に連れられて、お寺に来ては、
その当時、裏にあった公園で、遊んで待っ
ていたのを覚えています。そのころは、同
じ年頃の子供も多くて、少年部での行事も
沢山あり、すぐに友達も出来ました。

友達ができてからは、お寺で一緒に遊ん
だりすることを楽しみにして、来ていたの
を思い出します。

また、高校進学の際には、お寺で信者さ
んに勉強を教えてもらったことを思い出
します。その方には、看護師になるまで勉強
を見ていただきました。私が看護師になれ
たのも、お寺で勉強を教えてもらえるご縁
をいただけたからだと思います。

子供のころの私にとって、お寺は信仰と
いうよりも、友達に会える場所・安心でき
る場所・勉強を教えてもらえる場所など、
私の成長を支えてくれるよりどころだ
ったと思います。

この時期があつたからこそ、お寺に来
ると、いつでも心休まる気持ちになるのだ
と思います。

しかし、成人してからは仕事が忙しく
なり、だんだんと足が遠のくようになって
いきました。

さらに、結婚してからは、主人の転勤
で、埼玉に引っ越しましたので、埼玉の源
流院さんを紹介してもらいお世話になっ
ていましたが、出産してからは子育てに忙
しく、また自宅から離れていたこともあ

なかなか足を運ばませんでした。

子育ては、自分の思い通りにならないことが多くて、一番しんどい時期でした。子育ての本を読んだり、ネットで調べたりして、何とかしようと必死でしたが、思うようにはなりませんでした。

そのたびに母に電話すると、「お寺に行きなさい、信心をしつかりやりなさい、あなたの信仰が試されているよ、早く信仰の柱を立てなさい」と、よく言われました。

子育ての話聞いてほしいのに、信仰の事ばかり言われるので、最後には喧嘩になって電話を切るということも多々ありました。

それでも、どうしようもない気持ちになって、母に言われたことを思い出し、源流院さんに出かけ、御経を唱えて講話を耳にする、不思議と気持ちが落ち着き、元気になる自分があったことを思い出します。

子供が五歳になつてから、再び大阪に戻る事ができました。

主人は、私の信仰に何も言わない人でしたが、私の中に、家族を置いて、一人で毎月お寺に行くことに後ろめたい気持ちがあり、毎月、日曜の御講に行つてくるとはなかなか言えず、平日にある御講で、仕事の

休みが合う時にだけお寺に来ていました。

お寺に来ると、「よく来たね」と昔から知っている方々に声をかけてもらい、こんな私でも声をかけてくれる人がいて気持ちが温かくなりました。

コロナが流行りだし、御講も人数制限のため、事前に連絡が必要になったこともあって、参拝するのが億劫になり、足が遠のきかけていた頃に法華講の方から、

「地区役員をお願いできないか」と声をかけてもらいました。

自分出来るかな、と思っていました、息子も高校生になる時期で、少し手が離れてきましたので、今までお世話になったお寺に、少しでも御恩返しが出来たらと思ひ引き受けることにしました。

ただ主人には、
「お寺の手伝いをしに行かないといけな
いから」

と言って、地区役員になるとは話しませんでした。

毎月お寺に行くようになり、
「そんなにお寺のお手伝いがあるの？」
と不思議そうでしたが、反対される事もなく、すんなり行つてらっしゃい、と言って

くれました。

今から思うと、地区役員のきっかけがなければ、コロナ禍で足が遠のいてしまい、そのままお寺に來られていなかったかもしれないと思うと、本当にいい機会を与えていただいたと思います。

改めて振り返ると、幼いころに母と離れて暮らしたことで信仰に縁をし、母が口うるさく信仰の事を言い続けてくれたおかげで、子育てや病気の辛い時期も、お題目を忘れず乗り越えて来られたと思います。

また、小さい頃からいろいろな人との縁をいただいたおかげで、源立寺を離れて来た時期があつても、信仰から離れてしまふことなく、今の自分があるのだなと思ひます。信仰に縁をした不思議さと、いろいろな人との縁に感謝しありません。

まだまだ至らない事だらけで、信仰の確立には程遠いですが、これから一層、大聖人の教えを学び、自分の信仰に自信が持てるよう精進したいと思ひます。

また、今は自分だけの信仰ですが、いつか主人や息子にも、この信仰を一緒に歩みたいと言つてもらえるように、努力していきたいと思ひます。

【所感発表】

形か心か―父が継続したものは

北摂地区 橋本良介



所感発表をされる橋本良介さん

立寺の法華講で皆様方のお世話になり、おかげさまで幸福感に満ちた晩年を過ごして、人生を終えることが出来ましたことを、法華講の皆様方には本当に感謝いたしております。

私は、「信・行・学」いずれをとっても、父には至らぬことだらけです。

その私が、創価学会時代の父の信仰について、これからお話しするということには、我ながら「何様のつもりだ」とも思いますが、「やれやれ、大いにやってくれ」と言う父の声が聞こえてくるような気がしますので、遠慮なくお話しさせていただきます。

私の父が創価学会に入会したのは、一九六〇年ごろで、私が小学三年生ぐらいの時でした。その頃、父が役員をしていた会社が傾きだし、数年後に倒産。その

後も、仲間と一緒に新会社を起こすなど、いろいろしたようですが、いずれも失敗しました。

そんな中でも、父は学会活動に走り回り、終電車も過ぎた夜中にタクシーで帰宅、ということも珍しくありませんでした。生活費を家に入れることも家賃の支払いも滞りがちになり、あちこちに借金を重ねる中での、タクシー代支出でした。その当時の本人としては、妻子のことを思えばこそ、それが正しいと思ひ学会流「ご利益」を求めて、学会活動にのめり込んでいったのでしょうか。

私の兄弟、つまり父の子供は、男ばかり四人で、私は末っ子です。

当時、長兄はすでに東京に単立っており、学校で水泳部だった次兄は、やがて海上自衛隊へ行きました。三番目の兄と私は、すさんだ家庭に残りました。その故か、私の素行も乱れました。

その頃の母は病弱で、今にして思えば神経性胃炎だったようです。ひんぱんに寝込み、枕元に洗面器を用意させ、嘔吐を繰り返すという状態でした。

ただ当時の学会にも、人間味の豊かな

こんにちは。北摂地区の橋本良介と申します。本日は所感発表ということで、私が見て感じた父の信仰を通してお話をさせていただきます。よろしくお話しします。

私の父・橋本義一は一九八〇年から一九九八年に八十六歳で亡くなるまで、源

苦労人タイプの人もいました。地区部長のAさんは、まさにそのような人で、母に、

「あんたは働いたらアカン。あんたが働いてもご主人がその分もつぎ込んでしまっただけや。」

と励まし、父には謹慎を命じたそうです。この人には母も敬服していたことから、いつしか母も学会活動に励むようになり、憲法にそむく選挙活動等までするようになっていました。

学会活動謹慎中の父は職安へ行つて再就職し、ようやく生活も立て直し始めました。

しかし、学会の上の方は、どんどんおかしな方向へ向かっていました。まともな社会人として考えられない、異常な選挙活動はなおも続けましたし、会員・信徒から多額のお金を集めて建てた正本堂は、「東洋一のナントカ」とか、「世界一のナントカ」といった、「蔵の財」を誇示する奇妙なものでした。——今では影も形もありませんが……。

ちようどそんな時期に、私がC型肝炎に罹り、長期療養のため、両親の元に戻

っていた関係で、一九七〇年代の半ばに、父のそばで創価学会の青年部に所属することになりました。自分の本当の気持ちとは違う、形の上だけの所属で、面従腹背でした。

その当時、私は、父母と住んでいた枚方から、こちらの源立寺のお講に通い、ご住職のお話を後ろの方で聞かせていただいていたことで、池田氏の本尊模刻等の謗法ほうぼうを知り、母と私は学会が誤っていることに気づきましたので、少しずつ学会の誤りについて父への説得を試みたのですが、いつも父が話の途中で怒り出すということの繰り返しでした。

そんなこう着状態が一年ほど続いたある日、突然、父が「源立寺のご住職に質問がある」と言い出しました。

いざ、ご住職と対面する時には、父の心の中で決心はついていたようで、質問もそこそこに終えて、その日から、父の信仰は、一八〇度激変しました。

実は父は、私たちの話に烈火のごとく怒っていた時から、

「創価学会員という形だけの継続か」「正しいものを求める心の継続か」

のどちらを継続すべきなのか、心の中で葛藤を続けていたようです。すぐ怒ったのは、葛藤していたからこそ、だったのでした。

父の人生は、その後大きく花開きました。父は、親戚や友人・知人にも、学会時代の非礼をお詫びして、兄たちとも和解できました。喧嘩の絶えなかった母との関係も、すっかり「おしどり夫婦」に変身しました。

三番目の兄と同居し、孫たちに囲まれた幸せな家庭を基盤に、法華講で活動させていただきました。もともと陽気で楽しい人でしたので、嬉々として活動させていたように思っていました。

このように、父は信仰の岐路に立った時、形あるものの継続よりも、中身の継続を選びました。それが、見事に力に結実したのでした。

何を継続していくか、何を大事にしていくか、父の姿に、その答えははっきりしていますので、私もそれを見習って、日蓮大聖人の信仰に、これからも精進していきたいと思っております。

ご静聴ありがとうございます。

【所感二編】

女子挺身隊 苦難の時代

槻木地区 山田 昌



市のインタビューを受ける山田さん

【山田さんのお手紙より】

川西市では、戦争の記憶を風化させないために、「あなたの記憶を聞かせてください」と題し、戦争体験談や、戦時中

の思い出を募集していきまして、応募しまして、戦後七十五年、七十六年の二編を「女子挺身隊」、「苦難の時代」をパソコンに入れてくれました。

私が語っているのを見て戴けたら幸せです。もう九十歳を過ぎ、明日はわからない身に、花道を作ってくれて有難いと思います。

二編の文章です。二度と恐ろしいことはないことを願っています。 山田 昌

【参照】

▼動画……川西市公式チャンネル

<https://www.youtube.com/watch?v=kuzqKELX1FE>

KEIX1FE

▼原文……川西市ホームページ

<https://www.city.kawanishi.hyogo.jp/>

kurashi/shimin/jinken/1014348/101435
9/1014359.html

※ ※ ※

◆女子挺身隊

昭和二十年、高等女学校（今の中学三年生）の四月末に、五月からは、

「皆さんはお国の為に女子挺身隊として、工場へ働きに行くことになりました。学生生活は、今日までです。」

と、それぞれ分担されて皆、別れ別れになりました。名残りを惜しんで、夕やみせまる頃まで学校にいました。淋しい思い出でした。

私は、池田のダイハツ工場へ行くことになり、そして見たこともない施盤工として働くことになりました。

「バイト」とか云う刃物を差し込んで物をけずるのですが、エンピツけずりところが、なかなかうまく出来なくて困りました。みんな出来ないことばかり、機械になやまされて大変でした。高射砲

の止め金とか？。

工場の班長さんからは、

「みんな、お国の為に戦地で働いている兵隊さんにすまない、こんなペケ物ばかりこしらえて、物資不足の折から何ということだ」

と叱られました。

みんな泣いてしまつて、その時、付き

そいで来られていた先生二人が、

「何年もかかつてなる施盤工がする仕事を、わずか十五歳の何も見たこと持ったこともない、しかも、女子がそんなにきつちり出来ることがありません。もう少し大目に、やさしく見てやつてほしい。生徒は、なまけてなんかいません。一生懸命にやっています。出て来ないのだから。」

と云つて下さつた。

皆うれしくて、また泣けてきた。生徒を見守つて下さると思うと、涙が止まらなかつた。それから間もなく、終戦になつた。

あれからもう今年で七十五年、もうその時の乙女も九十歳。孫やひ孫と楽しく日を送っています。この子供たちには、あんなつらい青春を送らなくてもよい、平和が続く日本であつてほしい、と願っています。

※ ※ ※

◆ 苦難の時代

戦争を知る人も、だんだんと少なくなつて行く今、私も、九十一歳になり、昭和十六年に小学校五年生だったことは忘れて行く様になり、今、心に残っている、あの恐ろしい戦時中の、最前線での兵士はもとより、国に残っている国民も大変だったことは、戦争を知らない若い人に少しでも知ってもらいたくて書きました。書いた以上に、まだまだ大変でした。若い人にも、この平和が続くことを願つて書きました。

今年で戦後七十六年、遠い過去となつて、終戦というのは、テレビでもよく言

っていますが、知る人も多く、しかし始まつたのは、昭和十六年十二月八日、当時、私は、小学校五年生の時でした。

朝早くからラジオのあの勇ましいマーチと共に、「大本営発表……」という放送に、日本中が沸き上がりました。

学校へ通う道では、人々が「日本は大勝利や」と、さわいでいました。学校でも教室の黒板に、世界地図を出して、こんな大国と戦争を始めて大勝利、と先生の説明がありました。

小学生の私には、なぜ戦争が始まつたのか、わかりませんでした。

十二月八日は、「大召奉戴日」になり、小学校も、全国すべてが国民学校という名に変わり、放課後に「ナギナタ」が入り、「エイ」、「ヤア」とやりました。

毎月八日は、地域の神社に集合して、みんなで必勝祈願をして、赤紙で招集されて出征する兵士の家では、背の高い「のぼり」が上がり、学校の運動場では、地域の兵士の見送りがあり、生徒も、毎日の様に旗を振つて、



釣り鐘出征（本文と直接関係はありません）

寺の鐘が召集されることになり、送り出しましょう」

と言うようになりました。

戦争に行く釣鐘のことを、先生が言ったら、今の子どもたちはきつと、

「へエ、お寺の鐘が出征やて…」

と笑うでしょうが、その時は、誰一人笑う者はいませんでした。

運動場に、赤いタスキを掛けて、大小の鐘が、すまし顔で座っていました。そしてみんなで、

「のぼる旭日の輝きに、たそがれなびく雲を越え、戦に進む

釣鐘よ、広い世界へ鳴りひび

け」

と唄いました。

夕やみせまる道を、馬力（馬が引く荷車）にのせられて、ひづめの音と共に消えて行きました。夕やみせまる秋のもの

淋しい日でした。

それから、「進め一億火の玉だ」というポスターがあちこちに貼られて、戦地の兵隊さんに、銃後の守りは固いことを手紙に書いて送ったり、出征して人手の足りない農家に車引きに行ったり、何でもお国の為という事で変って行き、物資が不足して、主食や衣料品も配給制度に変わり、キップになりました。

店は閉めてしまふ所が多く、少しでも開いていけば、人々は品をもとめて行列が出来て、お金では買えなくなつて、物々交換が始まりました。見つければ「やみ」をしただろうと云つて、警察につれて行かれる始末、終戦までは言うに言えないことが、山積みありました。

苦しい時代に生きた者のことを、忘れてほしくありません。十二月八日、八月十五日は、今一度、過去のことを思い出し、反省の日になればと思います。若い人にはよくわからないかもしれませんが、どうにも出来ない苦難の時代もあったことを、知ってほしくて書きました。

「我が大君に召されたる…」
という歌詞の「出征兵士を送る歌」を唄って送りました。

だんだん、始まった時より、世の中が変わり始めていき、戦地へ送る武器が不足しているので、

「銅や鉄の少ない日本だから、今度お

【紀行】

聖 跡 巡 り

槻木地区 井元恵子

今まで大聖人ゆかりの地を、佐渡、安房と行ってきましたが、今回は、思い切って身延く静岡く千葉県市川市く東京都大田区く伊豆の聖跡を巡る旅を、四月の二日（日）から一週間の予定で、同じ講の井上真理さん（大阪地区）と二人で巡ってきました。

真理さんにとっては、以前にも行かれたことのある所ばかりですが、私が行きたいといいましたら、『よっしゃ！行こ』と快く言っていたいただきました。

今回旅行するにあたって、真理さんは私の身体のことを考え、簡易トイレとカーテンと巻きバスタオル、いつ横になってもいいように、マットレス、毛布、枕等を準備するなど、大変気遣っていた

できましたので、安心して旅行することができました。本当に感謝、感謝です。

一週間の行程を、レンタカーで回るので、車をとっても安く手配してもらい、日曜日に大阪を出発しました。

初日（二日）の日曜日は移動日。大阪から山梨県身延まで、車で約六時間半。やっと旅館に着き、明日からどこを廻るか作戦を練って床につきました。

二日目。最初は、旅館から車で五分の所にある蓮華寺です。

朝、体調の悪い私に代わって真理さんが運転して向かいます。蓮華寺は日興上人様のご生誕の地です。日興上人様の父方の、大井氏の屋敷跡に建立されたのが蓮華寺です。



日興上人生誕の地と伝える蓮華寺

身延山においてお体のすぐれなかった大聖人様は、弘安五年九月八日、養生するために身延を離れて、常陸の国（茨城県）に湯治をするために旅立たれました。その経路は、身延山麓に流れる富士川を北上し、富士山の北麓を回って、武蔵国（東京都）を経て、房総半島に向かう道を選ばれたそうで、その道中で大井荘司入道の館に一泊された、と蓮華寺のパンフレットに記載がありました。

大井荘司入道は、日興上人様の父上ではなく、その縁戚筋の者とも書かれています。（出典は「大井荘司入道御書」（全集一三七七頁）だそうです）

蓮華寺は、丘の中腹にあり、本堂などはそう大きくはありませんが、横手や裏山は広くて、沢山の墓地がありました。本堂から朝のお勤めのお経が聞こえてきたので、本堂には上がらないで蓮華寺を後にしました。（※『恵日』五月号の「興風談所の研究成果（十八）」に、従来この鯉沢が出生地とされてきたが、上代の「弟子分帳」等の記録にその記述がなく、検討の余地があると記載されていますので、本当のところはわかりません。）

次は身延山です。身延山久遠寺に向かう道中に、波木井山や波木井川の名前がありました。大聖人様が身延へ来るきっかけとなった波木井殿（南部実長公）はこの地名が由来の名字なんだなあとということが想像でき、私たちを楽しませてくれました（御書にも「波木井殿御報」や

「波木井殿御書」などがありました）。久遠寺には、蓮華寺から四十分弱で着きました。

総門をくぐり抜けても、三門まではながと民家が続いています。身延山総門内は、約三百万坪という広大な敷地だそうです。

三門の左手の道を上がって行くと、左手に一番来たかった大聖人様の御廟所（お墓）と草庵跡があります。車を止め



大聖人様の草庵跡

て五分ほど歩いたところに、その草庵跡があります。

この草庵跡は、十八・一八メートル四方で、身延町教育委員会の立て看板には、大聖人様が、

「文永十一年（一二七四年）六月十七日より、弘安五年九月八日までの九年間、時には厳冬と戦い、時には飢餓に耐えながら、昼には終日門下の教養に努め、また法華経の深旨を論談し、夜は深夜まで、法華経要文の読誦と著述に励まれた聖地である。」

とありました。看板にはありませんでしたが、「庵室修復書」の、

「この山のなかに、き（木）をうちきりて、かりそめにあじち（庵室）をつくりて候ひしが……聖教をよみまいらせ……」（全集一五四二頁）

を思い出し、大聖人様がすぐそこにいらつしやるかの様な情景が浮かびました。その草庵跡からすぐ上に、大聖人様の御廟所があります。御廟所の前に立ち、真理さんと方便品と自我偈、お題目をあ



身延山山頂から望む富士山

げました。私は、なんだか涙していました。

そこから移動して、今度は身延山ロープウェーに乗り、身延山山頂へ。

身延山登山は、歩いて登れば片道五キロの道程で、約二時間半〜三時間かかるところを、ロープウェーに乗れば、たったの七分です。

ロープウェーを降りた所から階段を登って行くと、途中に、大聖人様お手植え

杉という大杉がありました。ご両親の二本と立正安国の杉が一本、それに清澄寺の道善房の杉一本の、合計四本の大杉です。ここまで大聖人様は登ってこられたのでしょうか。

当日はすごく天気が良く視界も良好で、北側に連なる南アルプス山脈が、凄く清々しくてとっても綺麗でしたし、南側には綺麗な富士山が見られました。

下山して、本堂の周りを見てみると、枝垂れ桜がすでに散っていました。少し間に合わなかったようです。でも、身延川沿いの枝垂れ桜は満開で、とても綺麗でした。

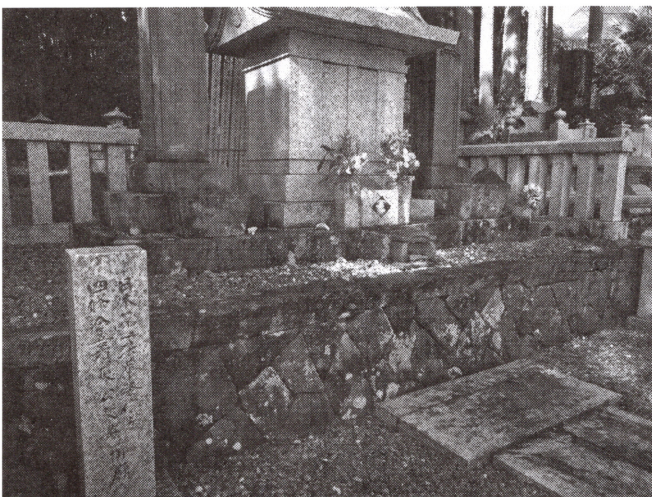
次は、四条金吾頼基公ゆかりの内船寺です。

身延からは、約三十分弱で着くはずが……何ともレンタカーに付いているナビが古く、今は無い橋を渡れというのです。グルグル回って、やっと着きました。

内船寺に着くと、庭を手入れされている女性の方がいらつしやり、真理さんが声をかけてみると、四条金吾頼基公のお

墓へ、案内してもらおうことができました。お墓は、本堂の裏手を少し上がるとありました。お墓は石材で囲われた廟になっていて、傷まないようにということでしょうか、外からは昔からの墓石が見えないようになっていました。

このお寺では、一年に一度、三月十五日の午後一時に、祥月命日の供養会を行っていて、その時だけは、廟の扉が開けられるそうで、中の墓石が見られるそう



内船寺境内の四条金吾の墓



有明寺

です。お墓の前で方便品、自我偈、お題目をあげました。

境内には、珍しい鬱金桜うこんざくらが咲いていました。ちょうどその日は旧歴の雛祭りの日ということで、本堂の横にはお雛様がたくさん飾られていました。

要らなくなったお雛様をお寺に持ってこられるとかで、それはそれは沢山のお雛様で、圧巻でした。

案内していただいた方は、住職の奥さ

んだそうで、とても気さくに色んなお話をしてくださり、私たちの旅行の日程を聞くと、

「池上本門寺に行かれるなら、茶毘所と臨終の間は、是非行って見てください。」

と教えてもらったり、お茶とお菓子をごちそうになったり、時間を忘れそうでしたが、さらにタケノコとお練香のお土産までいただいて、内船寺を後にしました。

(四条金吾とは通称で、本名は四条頼基で、官職が左衛門尉。左衛門尉の唐名〈中国名〉が金吾であったため、四条金吾と呼ばれていたということ、初めて知りました。)

次は、有明寺です。日有上人様が晩年過ごされた所です。

御会式の申状で、一番最初に奉読されているのが、この第九世日有上人ですね。有明寺に行くには、内船寺からまた北に上ることになり、三十五分走りました。

有明寺に着くと、お留守番の方が帰られる所でしたが、本堂を開けてくださり、

日有上人様のお墓にも案内してくださいました。

そんなに大きなお寺ではなく、日蓮正宗とありましたので、宗門側の寺院みただけでした。

初日はここで終わり、明日のために一時間と少しかかりましたが、富士宮市に泊まることにしました。

道中には、色んな桜が咲いていたのですが、たまたまきれいな桜だと思い込んでいたのを、二人で降りて確かめると、なんとその咲いていた花は紅梅だった、ということがありました。時期はとつくに過ぎているのに、今頃咲く梅もあるってことですね。



日有上人のお墓 (有明寺)

恵日だより

案内お知らせ

*お盆お塔婆のご案内

※お盆のお塔婆の申込み受け付けを、開始しています。

お盆が近づくと混み合いますので、なるべく早めに申込みをお願いします。

【計報】

〔豊能地区〕池田市

富徳院妙唱信女 六月十八日寂

俗名金丸フジエ之靈 行年八十七歳

この度、右の方がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

【文月詠草】

愛犬の 死に直面し うろたふる

〔和風〕

娘は泣きじゃくりつ 食事もとらで

雨あがり 清しき朝の 地鎮祭

夏うぐひすの 近くさえづる

【恵日俳壇】

〔農婦〕

夏の夜の荷をする野菜ほてりあり
逆らふを諦むる程夕立くる

〔森秀之〕

月参り墓草濡るる梅雨入りかな
日本列島一斉の雨梅雨入りかな
早々の梅雨入りを聞く高速道

〔故吉田裕〕

晩春の籠より蛸の躰り出る
どんたくの観衆の中吾もゐる



七月の行事

- 一日(土) 午後二時 お経日
- 二日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 九日(日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日(木) 午後一時 お講
- 二十三日(日) 午後二時 法華経講義

※八月号の継命・恵日発送(7月末)は、
「槻木」地区が担当です。
九月号の継命・恵日発送(8月末)は、
「大阪」地区が担当です。

◆お盆の棚経について◆

お盆の棚経を今年より再開します。
八月八日(火)～十二日(土)に実施します。
各ご家庭でご僧侶を招いて先祖供養を勤められたい方は、七月十三日の御講までに、受付までお申込み下さい。七月下旬に日程表を編成してお参りする日をお知らせします。
(なお、ご希望の日時がある方は、申込む時にお知らせ下さい。)

源立寺

恵日

令和五年七月号 通巻三四二号

令和五年七月一日発行

編集兼
発行人

菅野憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (072) 751-3335

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料)年間二〇〇〇円

〒振替 加入者名 恵日編集室会計

口座番号 0138012112649